

六月のテーマ

親の子、子の親



え・城谷俊也

過去と未来をつなぐ橋渡しを

四月に新入社員として入社した人の中には、初任給で、

社会人としての親孝行に取り組んだ人もいます。

転職情報サイトのDODA(デューダ)が、二十代の会社員を対象に行なったアンケート調査では「社会人になってから親孝行をしましたか?」という質問に、65%の人が「した」と回答しました。

内容はプレゼントが主たるもので、バッグや定期入れ、旅行、選べるギフトなどが挙がっています。

「孝行」という言葉を辞書で引くと、「子として親を大切にすること。また、そのさま」とあります。「親を大切にする」とは、様々な事柄があてはまるでしょう。プレゼントを通して感謝の気持ちを伝えることもその一つです。親の立場からみると、「自分より先に死なない」「結婚して孫を見せること」などもあります。

また、すでに親を亡くしている人にとっては、お墓参りをしたり、仏壇を掃除することなどを通じて、親に思いを馳せることも孝行とい

えるでしょう。

修養団の伊勢道場長などを務めた教育評論家の中山靖雄さんは、著書『すべては今のためであったこと』(海竜社)で、あるご婦人のエピソードを紹介しています。

母の日のこと。あるご婦人が、
「お母さんはもう亡くなって親孝行もできない。せめてお墓の掃除でも行こう」と思い立ちました。出かけようとする、高校生の娘が一緒について来てくれました。

家に戻って夕食後、お風呂に入っていると、後から娘も入ってきました。「お母さん、タオルとシャボンを買って」と言つて、背中を流してくれたのです。「何あなた、あまり変わったことしないでよ」と言うと、娘が「生き仏の墓掃除よ。死んでからはこんな温かい墓石、流せないもんね」と言いながら、背中を流してくれたのです。

婦人は顔を洗いながら、こみ上げる涙を隠すのが精一杯でした。「親を大切にしたい」という思いを行動に表わしたお墓掃除は、同時に、娘にもその思いが通じた

ことを物語っています。親祖先を敬う心は、自然に子孫へと伝わっていくようです。

祖先は過去であり、子孫は未来である。その過去と未来をつなぐ中間に現在があり、現在は現実の親子によって表わされる。親は将来の祖先であり、子は将来の子孫の出発点である。だから子の親に対する関係は、子孫の祖先に対する関係でもある。(『沈黙の宗教―儒教』加地伸行著・筑摩書房)

祖先という過去と、子孫という未来をつなぐ橋渡しは、現在を生きている私たちに課せられた役割ではないでしょうか。連続と続く「いのち」をどのように子孫へつなげるかは、今を生きる本人次第です。

もし、自分の子供に対して(親不孝者だ)と感じているなら、まずは自分自身が親祖先に向けて、どのような孝行をしてきたかを振り返るべきでしょう。

過去と未来をつなぐ橋渡し役である私たちは、その流れを留めることなく、親祖先を大切にすることを子孫に伝えていきたいものです。